



# ずるいひと

---

---

Canan

---

---

行かないで、と何か月かに一度私は彼にすがる。そう願えば優しい彼が断れないことを私は知っている。

私の心ない要請にこたえて二人、朝焼けに身を焼かれるまで眠り続けるのだ。私と彼はお付き合いをしているのだからあながち間違っただけではない。彼と私が他人にならないために繰り返される、儀式。知人には腐る手前まで熟れたトマトのようだと評された関係だ。どこかを一突きされたらあっという間に腐り溶けて土に還る。彼の腕の中で目を閉じながらいつも自虐の笑みがこみ上げてくる。

出会った頃の気持ちはお互いにもうない。私にはもちろん彼にも。私は仕事を取った女だ。私が彼を必要とする唯一の理由は、求めに応じてくれる男がいると周囲に吹聴するためだ。数か月に一度しか引き止めないのも、他人からすればつらい遠距離恋愛もすべて計算の上。私たちはきっと、会いたいと言口にしさえすればもっと頻繁に会える距離にいる。

ごめんね仕事なの。口先ばかりで詫びて、私は彼の腕から抜け出す。何時間も前から、ずっと抱きしめていてくれた彼の檻から。恨みのように塗りたくった化粧を見て彼は言う。ちょっと濃すぎじゃない、と。私は曖昧に仕事用だから、と言葉を濁す。いつものことだ。変わらないルーチン。いつしか私は彼の前でほとんど化粧をしなくなっていた。電話も二週間に一回だ。こうやって私は彼の前にいくつものきっかけを置いている。別れたくなったらいつでも別れられる、どうでもいいたくさん理由を。けれど私は彼がそうしないことを知っている。優しい男。私が彼を必要としていると信じる、愚かな男。

彼の入れたコーヒーを口にしてから玄関に立つ。けして美味とは言えないコーヒー。自分でもっと上手に入れることもできる。そうしないことが彼を延々縛り続ける自分の罪滅ぼしになると信じている。

玄関まで見送りに来た彼に別れを告げて出勤する。ほんの少しの罪悪感に襲われるのはいつものことだ。

私が帰宅するころに彼はいない。やはりあまりおいしいとは言えない手料理と残り香だけを残して彼は帰っている。

ずるいのはどっちだ、といつも思う。

きっと今夜は電話がかかってくる。いつもの、ように。